

【飯盛城跡の概要】

飯盛城跡は大東市・四條畷市にまたがる飯盛山の山頂に築かれており、城域は東西約400m、南北約700mを測ります。享祿3年(1530)木沢長政の居城として文献上はじめて登場し、その後城主は、安見宗房を経て、永祿3年(1560)には天下人・三好長慶が居城とします。そして、当時の日本の中心であった京都と五畿内を支配する三好政権の拠点や文化交流の場となりました。城は北エリアと南エリアで機能が分かれており、北エリアは防衛空間、南エリアは居住空間であったと考えられます。発掘調査の結果、北エリアのV郭(御体塚郭)では曲輪の南東から磚(瓦と同じ素材の四角形の板)を用いた建物がみつかり、瓦や壁土、大量の鉄釘、特殊な用途の台付皿が出土しました。南エリアのV郭(千畳敷郭)・IX郭(南土)でも建物の柱を支える礎石がみつかったことから、礎石建物の存在が推定されます。

この調査結果から、飯盛城は織田信長によって完成される高石垣や天守を備えた「織豊系城郭」に先行して、石垣・礎石建物・瓦の3つの要素を取り入れた城であることが明らかになりました。城を破壊した痕跡は認められないことから、城跡は、飯盛城が城郭としての機能を失う永祿12年(1569)頃の姿を留めていると考えられます。



1. 飯盛城跡遺構 2. V郭(御体塚郭) 場列検出状況 3. V郭(千畳敷郭) 礎石検出状況 4. 曲輪群Eの石垣

【石垣を多用した山城】

飯盛城跡には、要所に石垣が築かれていることは以前より知られていました。しかし、平成28年度から3ヶ年にわたる詳細分布調査によって、虎口以外に石垣が存在しないと考えられていた南エリアのV郭(千畳敷郭)で全長22mにおよぶ石垣(写真7)を発見しました。この発見により、城の全域に石垣が用いられていた可能性が高まり、戦国時代末期では珍しい本格的な石垣を多用する山城であることが明らかになりました。

【石垣の分布】 飯盛城の城域には多くの石垣が築かれていますが、その分布は北エリアの東側に集中しています。特に1郭(高輪郭)や曲輪群B、V郭(御体塚郭)や曲輪群Eに石垣が多く築かれています。また、南エリアの虎口にも石垣が築かれています。東斜面には、槍現川沿いから城に至る登城道があった可能性があり、飯盛城を訪れる人々が通る場所から見える位置に多くの石垣が築かれたと推定されます。石垣を登城道から見える位置に築くことで、城主の威光を示したと考えられます。

【石垣の特徴】 石垣は自然石を垂直に近い勾配で積んだ野面積みです。また、排水機能を高めるために石垣の背面には築石が充填されています。石垣は勾配が垂直に近くなるほど高く積むのが難しくなります。そのため、飯盛城では1段目の石垣を積んだ後に、大抵平坦面を設け、さらに2段目を積む段築状石垣とし、高く見せる工夫がされています(石垣1と石垣69など)。延長の長い石垣では、崩れるのを防ぐために隅角部(出角)が構築されています(石垣69)。

【石垣石材】 飯盛山は花崗岩質で形成されており、山中では節理(岩石の割れ目)の発達した花崗岩の露岩が見られます。石垣付近には露岩が位置し、築石に削った痕跡が認められないことから、石垣石材は付近の露岩から節理を利用して採石されたと考えられます。

飯盛城跡に残る石垣を見ていくと、石垣石材の調達方法や、石垣を崩れにくく、高く積むために施された工夫がわかります。これらは戦国時代の土木技術であり、石垣は当時の技術を現在に伝える貴重な遺構といえます。



7. V郭(千畳敷郭)の石垣



※奥 四条畷地下車、徒歩約100分
※中 野塚地下車、徒歩約10分
※前 四條畷地下車、徒歩約10分

飯盛城跡

— 石垣ガイド —

